

若手研究者のための研究キャリア発見マガジン

2025. 秋号

vol.70

[インキュビー]

incu・be

特集

最先端を
ベンチャーで
切り拓け!!



特集 最先端をベンチャーで切り拓け!!

- 04 日本人のDNAメチル化情報を集め、老化制御に挑む
(仲木 竜 さん 株式会社Rhelixa 代表取締役 CEO兼CTO)
- 06 自動便解析を当たり前にし、病気ゼロの世界をつくる
(水口 佳紀 さん 株式会社メタジェン 取締役 CFO (Chief Financial Officer))
- 08 「本当に使える」災害用水洗トイレを追究し、実装する
(高波 正充 さん 株式会社e6s 代表取締役)

伝える、学ぶ、そして育む。それが研究コーチ

- 11 もらった恩を後輩へ。信頼関係から始まる相互の学び
(佐藤 寛通 さん 東京大学大学院 農学生命科学研究科 水圏生物科学専攻 博士課程1年)

Blast off! 世界を変える私の活動

- 14 基礎医学研究を支える冷蔵輸送技術を、いち早く世界に広めることを目指して
(前田 龍成 さん 熊本大学大学院 医学教育部 博士課程3年)

探しにいかう 自分の場所

- 16 アカデミアの外で「人類学者」として生きる
(水上 優 さん 合同会社メッシュワーク 共同代表)
- 18 技術の産業応用への挑戦が育まれる舞台を創る
(宮島 孝幸 さん ダイキン工業株式会社 テクノロジー・イノベーションセンター インバータ技術グループ)
- 20 地域に根差し、人と技術の両方に向き合う研究職
(河原 崇史 さん 新潟県工業技術総合研究所 工業技術研究職 (化学))

あの町の研究者を訪ねて

- 22 「感動とはなにか」アートと分析で解き明かす
(伊藤 明倫 さん 静岡理工科大学 情報学部 准教授)

お知らせ

- 12 第70回リバネス研究費申請者募集中！
小さな研究費が、あなたの未来を大きく変える—リバネス研究費が開く新しい扉—
- 24 私らしく、研究者として生きる道へ「アド・ベンチャーフォーラム」
- 26 研究キャリアの相談所
- 27 『incu・be』を作っているのはどんな人？
- 28 リバネス採用ページ

特集

最先端をベンチャーで 切り拓け!!

「最先端の研究がしたい」

そんなときにみなさんが真っ先に思い浮かべるのはアカデミアでのキャリアだろう。

しかし、自由に自ら切り拓いていく研究はアカデミアだけだろうか。

「ないなら自分でつくる」

そんな発想で最先端を切り拓いている研究者が、

実はベンチャーの創業者には多くいるのだ。

本特集では、研究開発を通じて社会課題の解決を目指すベンチャーを取り上げる。

起業したからこそできるようになった研究活動に迫っていこう。

日本人のDNAメチル化情報を集め、老化制御に挑む

仲木 竜 さん

株式会社 Rhelixa
代表取締役 CEO 兼 CTO

大学で生物のデータ解析を行ってきた仲木さんは、自ら稼ぎ、その資金でやりたい研究を行えるようにするため、株式会社 Rhelixa（以下、レリクサ）を起業した。始めは研究の受託サービスから始まったが、自身が生物学を進めたいという想いを持ち続け、アカデミアだけではできなかった、老化制御を目指す最先端の大規模プロジェクトを進められるようになった経緯に迫った。



自由な研究環境を求めて ベンチャーを立ち上げる

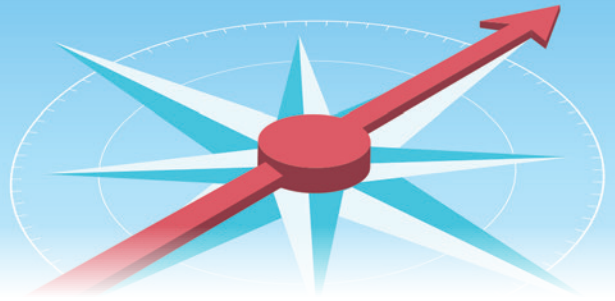
大学では、DNAの塩基配列やDNA上の化学修飾のデータの解析を行っていた仲木さん。アカデミックポストの研究者たちが研究費の獲得に苦労する様子も目にする中で、自身のなりたい将来像を考えるようになった。「研究室の博士学生の半分くらいがM.D.（医学士）でした。彼らは医者として働いて生活費を稼ぎながら研究に打ち込めるんですね。M.D.に限らず研究者が自らの専門性で稼ぎながら研究費に縛られず好きな研究をできないかと考えていました」。その想いを胸に博士課程在学中にレリクサを起業し、アカデミアで研究を行いながら会社経営を始めた。

稼げる仕組みを作るための試行錯誤

当初のサービスは、大学の研究と大きく変わらず、DNA配列のデータ解析を行い、変異や遺伝子の機能予測を行うものだった。起業当時の

2015年頃はゲノム配列を安価に調べられるサービスが普及し始めており、多くの研究者が膨大なゲノムデータを取得しやすくなっていた。一方で、取得した大量のデータの解析に困る研究者が増えると考えた仲木さんは、データ解析の受託事業を始めた。しかし実際は、簡単に依頼が増えるわけではなかったという。「サービスパッケージはなくて『何でも解析できます』のスタンスで営業していました」。直接話せば相手のやりたいことに合わせて説明ができるが、ウェブサイトやチラシなどの媒体や、営業活動をしてくれる代理店を介してしまうと、「何でもできる」は「何ができるかわからない」に変わってしまうのだ。

サービスの具体化が大事であることを学んだ後には、様々なサービスを立ち上げてきた。例えば、コロナ禍には新型コロナウイルスの創業開発支援サービスなど、立ち上げたものの全く売れず失敗したものの方が多いという。早くたくさん試すことができるのはベンチャーの強みだ。数多くの失敗からの学びを次のアイデアにつなげてきた。



▲関係者と共に、エピックロック®共創プロジェクトの開始を発表する仲木さん

大規模な研究プロジェクトを始動する

受託事業である程度稼げるようになる中で、「好きな研究をする」という当初の思いも実現したいと考えていた。そこで立ち上げたのが、老化制御を目指すエピックロック®共創プロジェクトだ。老化が進むとDNAのメチル化パターンが変化する。そのパターンを調べることで、生物学的な年齢が予測できることが知られていたが、日本人のメチル化情報を元に測定できるサービスはなかった。そこで、レリクサの解析技術を活かして、生物学的年齢を測定できる受託サービスを立ち上げ、それを指標として老化研究を加速させようとしたのだ。また、老化の研究は、DNA、免疫、代謝など様々な分野の専門家が独自に研究していることが多く、社会への実装も含めてそれらを束ねる取り組みはほとんどされてこなかった。現在このプロジェクトには、アカデミアだけでなく大手企業も参画するにまでなっている。「生命科学に関わる人に寄り添いながら、無視できないよう

な中心的な存在になれるように、技術開発を続けていきます」と仲木さんは語る。老化という多くのプレイヤーがいる分野で独自の事業を行えるようになったのも、自身の技術を活かしながら分野全体を発展させる方法を考えたからなのだろう。

ベンチャーだからできる科学の発展への貢献

今では50名以上の社員を抱え、多くの企業とも取引がある企業に成長したが、仲木さんの研究に対する根本的な考え方は変わっていない。「自分がやりたいのは、生物の未知を明らかにすることです。昔と違うのは、その手段が増えただけです」と語った。エピックロック®共創プロジェクトでは、より安価な測定方法を開発しながら、連携する病院の拡大を行い、社会に広めるための活動が続けるという。プロジェクトが広がることで、実証が進み、老化の謎も明らかになっていくのが期待される。自由に基礎研究をしたいという強い想いをもって起業した仲木さんは、研究室にいただけでは出会えなかった仲間を増やし、自らが中心となって生み出す科学の恩恵を社会に届けようと活動を続けている。（文・八木 佐一郎）

仲木 竜（なかき りょう）プロフィール

株式会社Rhelixa代表取締役 CEO兼CTO。東京大学先端科学技術研究センターにて博士号を取得。博士課程時にレリクサを起業し、現職に就く。生命科学の発展の加速を目指し、シーケンスデータやオミクスデータの解析受託サービスを展開する。2024年には、開発した生物学的年齢の測定技術を活用し、老化制御を目指すエピックロック®共創プロジェクトを立ち上げる。

自動便解析を当たり前にし、 病気ゼロの世界をつくる

水口 佳紀 さん

株式会社メタジェン
取締役 CFO (Chief Financial Officer)



「未解決の難病の人々を救いたい」という思いで、高専、大学、大学院と創薬や再生医療の研究を続けてきた水口さん。「研究を続けることではなく、自分のビジョンを実現することが最重要の目的」という彼が今、人生をかけて挑戦しているテーマ「腸内デザインによる病気ゼロ社会の実現」は、あるビジネスプランコンテストへの出場が転機だった。

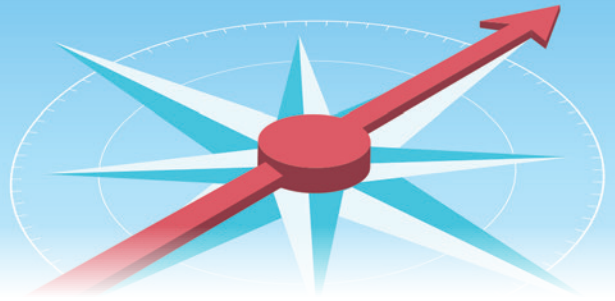
発想を飛ばした行動が、挑戦の扉を開いた

再生医療や組織工学を学ぶうちに「治療だけではなく、そもそも病気にならない『予防』というアプローチも重要なのではないだろうか」と次第に『病気ゼロの世界の実現』という夢を持つようになったという水口さん。転機となったのは、あるビジネスプランコンテストへの出場だった。研究を社会課題の解決に活かすという主旨のコンテストに、自分の視野を広げる機会として挑戦してみようと思った水口さんだったが、よく読むと要項には「ハードウェア開発を必須とする」となっていた。「とりあえずなにか考えてみよう」と心に決め、アイデアを構想した。そうして生まれたのが、当時健康状態のバロメーターとして注目されつつあった腸内細菌をテーマに、トイレで排泄された便をその場で回収、解析し、結果をユーザーにフィードバックするスマートトイレ「NGR2 (Next Generation Restroom)」という大

胆なアイデアだった。世界観を作り込んで応募したが、挑戦した2回とも、虚しくも書類選考で落選した。しかし、その後運命の出会いが訪れる。コンテストの主催者が「本気でアイデアを実現するなら、紹介したい人がいる」と連絡をくれたのだ。そこで紹介されたのが、統合オミクスによる腸内エコシステムの研究で有名な雑誌に論文をいくつも投稿する気鋭の研究者、慶應義塾大学の福田さんだった。水口さんと同じく『病気ゼロ』という言葉掲げており、お互いに意気投合。さらに同じく情報技術を駆使した腸内細菌も含むバイオインフォマティクス解析の先端を走る東京科学大学(当時は東京工業大学)の山田さんが加わり、出会って半年で、株式会社メタジェンを共同創業した。

壮大なビジョンを、社会で一歩ずつ進める

ヒトの腸内には、1人あたり数百～1000種類以上もの腸内細菌が棲む。腸内環境が病気の発症



▲メタジェンチームで「便から生み出す健康社会」のビジネスプランを発表したコンテスト

や健康維持に密接に関わっていることが、近年の研究で明らかになってきている。つまり、100人いれば100通りの健康があるということだ。山田さんと福田さんの参画で、他にはない腸内細菌の解析が可能になった。しかし病気ゼロは便の解析だけでは実現できない。どのような腸内環境の人にどのような食事や薬が効果的かというデータが不足しているのだ。水口さんは大学で博士号取得の研究を進める一方、メタジェンでは企業や研究機関からの共同研究や助成金を積極的に取りに行き、科学的根拠に基づく提案を可能にするデータベースの構築に力を注いだ。2年目には腸内デザインを通じ『病気ゼロ』の実現を共に目指す企業と連携する『腸内デザイン応援プロジェクト(2020年度から腸内デザイン共創プロジェクト)』を立ち上げ、参画企業と社会実装に向けた取り組みを開始。現在では大手食品メーカーと連携し、個人の腸内環境に適した食品や飲料といったヘルスケアソリューションの提供が実現した。

「病気ゼロ」は100年の研究開発計画

転機となったコンテストで腸内細菌を主軸に、世界を変える研究開発と事業開発に身を投じた水口さん。『「病気ゼロ」』というビジョンが自分の中に生まれてから、手段はなんでもいい、自分が今やれることをやる、という思考で走るようになった」と語る。そして、起業から10年経った2025年4月24日、メタジェンのグループ会社で創業事業を担うメタジェンセラピューティクス株式会社は、国内初となる献便施設「つるおか献便ルーム」を山形県鶴岡市に開設。献便専用の水を流さないトイレが設置され、「腸内細菌ドナー」が定期的に献便を行えるという施設だ。かつて水口さんが構想した「NGR2」で目指す便から生み出す健康社会が現実のものとなりつつある。「病気ゼロは、100年かけて挑戦するビジョン。研究と同じく、仲間と地道に進み続ける」それが彼の強さの正体だ。

(文・岸本 昌幸)

水口 佳紀(みずぐち よしのり)プロフィール

2015年、東京工業大学(現:東京科学大学)大学院生命理工学研究科修士課程在学中に株式会社メタジェンを共同創業し、取締役役に就任。2018年、同研究科の博士課程、及び文部科学省・日本学術振興会博士課程教育リーディングプログラム 東京科学大学情報生命博士教育課程を修了。博士(工学)。同社取締役COO、取締役CSOを経て現職。2020年経済産業省産業構造審議会臨時委員。2023年より文部科学省科学技術・学術審議会臨時委員。専門は細胞組織工学。

「本当に使える」災害用 水洗トイレを追究し、実装する

高波 正充 さん

株式会社 e6s
代表取締役

メーカーで世界と戦う製品づくりに携わってきた高波さんが株式会社 e6s を起業したのは、「社会の課題を解決したい」という情熱を持った中野和典さんという研究者との出会いがきっかけだった。先行研究でも、実用レベルでの解決策はまだ存在しない中、中野さんと共に「本当に災害現場で使える技術とはなにか」の追究を開始した。

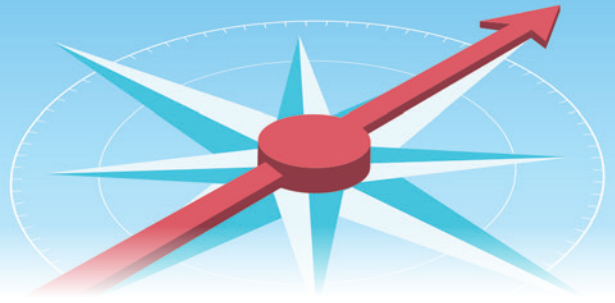


研究者との出会いが揺るがした価値観

大学で機械工学を学び、メーカーでエンジニアとしてキャリアを重ねてきた高波さん。当初の関心は「いかに優れた技術をつくり、世界と戦う製品を生み出すか」であった。社会課題の解決というより、ビジネスとしていかにライバルに勝つか、という価値観が中心だったという。転機は、新規事業を模索するなかで訪れた展示会。そこで出会ったのが、日本大学の中野和典さんが研究していた「ロハスのトイレ」だった。電気も水道も不要、植物と微生物の力で汚水を浄化する自立型トイレであったが、試作段階では1日数人分の処理しかできず、実用にはほど遠いものだった。とはいえ、災害時の衛生環境という課題に真摯に向き合う中野さんの姿勢に、当時は社会課題に無関心だった高波さんの価値観が揺さぶられた。「これは、絶対に解決しなければならない課題だ」。そう強く感じた高波さんは、中野さんと共にこの技術の社会実装へと踏み出した。

現場で「使える」技術を共に

トイレという生活インフラを扱う以上、技術的な完成度だけでなく、実用性・安全性・コストといった要素が求められる。先行研究を調べてみても、実用レベルでの解決策はまだ存在しなかった。日本大学でトイレの研究を続けてきた中野和典さんの試作機も、排泄物やトイレットペーパーなどの汚物全体を、微生物の力だけで分解・無害化する方式を採用していた。しかし高波さんは、「避難所で本当に使えるようにするためには、1日100人、200人が使える処理量が必要だ」と伝え、他のアプローチも組み合わせられないか、共に試行錯誤を始めた。これまでの研究内容や進め方にこだわる研究者も少なくない中で、実用的な災害時のトイレ技術の確立のためならと、中野さんは柔軟なスタンスで開発に取り組んでくれたという。高波さんと中野さんの二人だけでなく、中野さんの大学の研究室の学生たちも巻き込み、数十パターンもの検証を繰り返す中で、実用に足



▲トラックに搭載されたe6sシステム

る現在のe6sシステムが少しずつ形になっていった。汚物はまず、不織布フィルターによって固形分と水に分けられる。固形分はカセット式の容器で安全かつ簡単に回収でき、水はさらにろ過して再利用される。この処理方法にたどり着いたことで、使用時の処理速度とシステムの安定性の両方を備えた技術となった。

起業し、大学だけではできない研究を

このトイレシステムは、平時は通常の水洗トイレと同様に下水道につながっているが、災害時には簡単な操作で、電気や上下水が止まっても使える自立型に切り替わる――そんな「フェーズフリー」な設計が特長だ。試行錯誤を重ねてきたe6sシステムは実証フェーズを終え、いよいよ現場での実装を進めていく段階に移行している。大学だけでは進めづらい実践的な検証や、ビジネス面の課題にも対応するため、ベンチャーである株式会社e6sが創業された。2024年には福島県郡山市の多目的施設に正式導入され、トラックに搭

載して移動できるタイプの開発も進んでいる。

災害時には50人に1基のトイレが必要とされ、日本全体では約240万台の備えが必要とされている。しかし、人手も資金も限られる小さなチームだけで、その数をつくり、届け、使える状態で維持し続けるのは現実的ではない。とはいえ、災害時のトイレの課題は一刻も早く解決しなければならない。そこで高波さんは、他の企業や団体と連携し、社会実装のための体制づくりを模索している。たとえば、製造を他社に委ねる場合もあれば、販売や据付、保守だけをパートナー企業に担ってもらう場合もある。あるいは、自社で途中まで担い、以降を地域の企業に引き継ぐこともある。連携のかたちは地域や状況に応じて柔軟に変え、役割を固定せず多様な連携モデルを組み合わせながら、e6sは国内外での展開を見据えている。高波さんとの出会いでビジネス的な推進力も加わった中野さんの研究が、インフラとしてついに社会を支える技術へと歩みを進めている。

(文・駒木 俊)

高波 正充 (たかなみ まさみつ) プロフィール
横浜市出身。大手材料メーカーの執行役員を経て、2021年より株式会社e6s代表取締役。東日本大震災を契機に日本大学工学部の中野さんが研究していた技術と出会い、共同開発を経て起業を決意。災害時にも対応可能な自立型トイレシステムの開発に従事し、環境配慮型の持続可能なトイレの実用化を推進。環境保護と公衆衛生の向上に寄与。2020年度日本トイレ協会グッドトイレ選奨、ふくしまベンチャーアワード2022優秀賞を受賞。

「研究で世界を変える」が実現できる

研究費を稼ぐ仕組みを作りたい、という思いから始まった仲木さん、
突飛なアイデアをコンテストで発表したことが転機となった水口さん、
技術よりも社会貢献への想いを熱く語り高波さんの心を動かした中野さん、
それぞれの研究者の行動がきっかけとなり、アカデミアだけでは難しかった、最先端を切り拓く研究
につながった。

「やりたい研究をやる」という情熱はそのままに、ベンチャーというフィールドで挑戦する。
そうすることで変化した研究者が、最先端の研究を行い、世界を変える独自のプロジェクトを仕掛
けられるのだ。



伝える、学ぶ、そして育む。それが研究コーチ

若手研究者が中高生の研究に伴走して指導する研究コーチ。単なる教育活動以上に、自分に返ってくる気づきや発見があるはずです。このコーナーでは、研究コーチの経験を通じて成長する若手研究者の姿を取り上げます。

もらった恩を後輩へ。信頼関係から始まる相互の学び

東京大学大学院 農学生命科学研究科 水圏生物科学専攻博士課程1年
佐藤 寛通 さん

10代の海に関するあらゆる研究を支援する「マリンチャレンジプログラム」に高校時代に参加。視覚的に餌を捉えられないクラゲがどのようにエサを探しているのかを解明する研究に取り組んだことが、研究者人生の出発点になった。卒業後は同プログラムの研究コーチとして、長年後輩研究者の育成に携わる。



理科教師の親のもとで育ち、幼い頃から「研究者になりたい」という夢を抱いていた佐藤さん。マリンチャレンジプログラムでは、一つの研究を深めるにも膨大な冒険が待っていることを体験した。同プログラムで海の未知を実感し、将来像が海洋研究者へと具体化した。大学進学後は海洋環境へ興味を広げ、沿岸の海洋流動場や生態系の数値シミュレーションを用いた研究を経て、現在は地球温暖化による海洋中規模渦の変化が海洋生態系にどのような影響を及ぼすのかという地球規模の現象解明に挑んでいる。

夢を目標に変えてくれた恩を後輩に返そうと、大学進学後すぐに研究コーチを始め、現在は7年目となる。多様な生徒たちと接しながら「伝えることの難しさ」も痛感した。とりわけ印象深いのは、担当チームの生徒がオンライン面談当日に現れなかった時や研究がまとまらないまま発表本番を迎えてしまった場面だ。「自分では生徒と向き合っていたつもりでも、本当の意味で寄り添えて

いなかったのでは」と当時を振り返る。生徒一人ひとり背景が異なると自問した末、辿り着いた答えは「信頼関係」だった。以降、佐藤さんは信頼関係づくりを意識した指導スタイルに変えた。必要があれば生徒の元へ行き、一緒にフィールドに出て採集を行うなど、時間と労力を惜しまないサポートを始めた。結果、生徒たちは次第に心を開き、自ら成長して研究の先の進路まで切り開くようになった。その瞬間を目にしたとき、佐藤さんは心から「やってよかった」と感じるという。

佐藤さんが研究指導で大事にしているのは、分野を超えて応用できる力を養うことだ。「好きな生き物を調べるだけでなく、原理を突き詰め、試行錯誤の面白さを伝えるようにしています。生徒が自分で考えて走り出せる環境を整えるのがコーチの役目であり、自走できた瞬間に研究の本当の楽しさが見えてきます」。生徒が自分で問いを見つけ仮説や検証に取り組んでほしいと願い、未来の仲間を増やすべく、今日も情熱を注いでいる。

(文・三宅 進歩)

研究コーチは随時募集中！登録はこちら！

(リバネスIDのログインが必要です)



リバネス研究費とは

リバネス研究費は、「科学技術の発展と地球貢献の実現」に資する若手研究者の研究遂行を支援するための研究助成制度です。学部生や大学院生が採択された実績もあります。やってみたい研究がある、独立後に向けて研究費申請の経験を積みたい、そんなアクティブな若手研究者なら、誰でも応募できます。この機会に、自分の研究アイデアを具体化し、研究スタートへの第一歩を踏み出しましょう！

小さな研究費が、あなたの未来を大きく変える —リバネス研究費が開く新しい扉—

研究のアイデアはある。でも、最初の一步を踏み出す資金やきっかけが足りない——そんな若手研究者に向けて、リバネス研究費は誕生しました。採択額は1件あたり最大50万円。額面だけを見れば大きくはないかもしれませんが、過去に採択された研究者の多くは、この資金を「消費」ではなく、自分の研究を加速し、将来につながる出会いや成果を生む「投資」として活用してきました。『incu・be』vol.69の特集「少額研究費が切り拓く、研究者の人生」では、リバネス研究費を活用して自身の研究の可能性を大きく広げた研究者を取り上げています。申請を考えている若手研究者は必読です！



バックナンバー公開中！

リバネス incu・be

検索

第70回 リバネス研究費

助成対象：自分の研究に熱い想いをもちている40歳以下の若手研究者・大学院生・学部生・高専生
用途：採択者の希望に応じて自由に活用できます

● ガレージミナト賞

対象分野

機械設計の自動化と町工場での実装につながるあらゆる研究
金属部品加工に特化してきた町工場が、AIなどの新技術により上流の設計業務など周辺領域に挑戦できる時代が到来しています。誰もが手軽に設計が可能になる機械・装置設計の自動化、ジェネレーティブデザインの実現につながる研究を広く募集します。また、町工場の技術者が自動化技術を使いこなすための教育・人材育成に繋がる研究も募集します。

採択件数

若干名

助成内容

研究費50万円、町工場での研究・実証試験への協力

申請締切

2025年10月31日（金）18時まで

パートナー企業

成光精密株式会社

担当者より一言

超短期で精密部品加工に取り組んできた成光精密では、ガレージミナトを併設し、ベンチャーや研究者が持つアイデアをカタチにするサポートも開始しています。当社の加工技術者が、ポンチ絵や構想から要求機能を整理し、機械装置設計にチャレンジできる環境を作りたいと考えています。現在活躍するベトナム人技術者たちが将来的に使いこなせるようなツール、その使い方を習得できるプロセスの提案も大歓迎です。

◎ 第一工業製薬賞

対象分野

物理・化学・感覚的手法による消臭に関するあらゆる研究

香水の残香、生乾き臭、リサイクル品由来の臭気など、消臭が困難な臭気に対して有効な消臭成分の探索や新規消臭技術の開発に関する研究を広く募集します。物理的・化学的手法に加え、感覚的評価を含む多様なアプローチによる、革新的かつ実用的な提案を歓迎します。

採択件数

若干名

助成内容

研究費50万円

申請締切

2025年10月31日（金）18時まで

パートナー企業

第一工業製薬株式会社

担当者
より
一言

におい分野への注目が高まる中、第一工業製薬では従来の技術では対応が難しかった“消臭困難臭”に真正面から挑んでいます。単なるマスキングではなく、私たちのユニトップ技術「臭気中和法」を用いて問題解決に取り組んでいます。一方、これまで「不可能」とされてきた“消臭困難臭”に対し、「可能」に変えるには革新的なアプローチが不可欠です。においの問題に悩む現場に、実用性と独創性を兼ね備えた提案をお待ちしています。

◎ 日本ハム賞

対象分野

Proteinovation —たんばく質の新価値創造—

日本ハムのR&D戦略「Proteinovation（プロテインノベーション）」を実現する、畜産資源およびたんばく質から食を含む新しい領域への応用に関わる研究【ヘルスケア、医療原料、先端食品技術、化粧品、化学・工業・先端材料、環境・エネルギー、バイオものづくり】

採択件数

若干名

助成内容

研究費50万円

申請締切

2025年10月31日（金）18時まで

パートナー企業

日本ハム株式会社

担当者
より
一言

当社は、「畜産」を事業の柱として、動物性たんばく質を社会に供給してきました。一方で動物性たんばく質を含む生体由来素材には、まだ多くの潜在的な可能性が眠っています。私たちは、畜産資源およびたんばく質の可能性をテクノロジーとイノベーションにより最大限に引き出し、食領域と新領域で新たな価値と未来と一緒に創造していきたいと思っています。未来の誰かが喜ぶ姿を想像し、ワクワクするご提案をお待ちしています。

◎ プランテックス先端植物研究賞

対象分野

植物の生産性や機能性を高めるあらゆる研究

植物の生産性や機能性を高めるあらゆる研究を募集します。育種や栽培時における光や灌水、施肥などの環境条件の調節等により水耕栽培や養液栽培のポテンシャルを引き出し植物の生産性や機能性を高める研究テーマを歓迎します。

採択件数

若干名

助成内容

研究費50万円、Type XSの栽培試験環境を提供

申請締切

2025年10月31日（金）18時まで

パートナー企業

株式会社プランテックス

担当者
より
一言

プランテックスは環境制御性能を高めた独自の植物工場システムの普及を目指し事業展開しています。植物研究の成果を、植物工場での量産につなげる技術の開発に力を入れてきました。本研究費では、植物の生産性や機能性を高めることを目指す先進的な研究テーマを幅広く募集します。研究成果が将来的に植物工場の用途拡大や価値向上を通じて、世界の食や農業を取り巻く様々な問題解決に寄与することを期待します。

◎ PFASブレイク賞

対象分野

PFASによる課題の解決につながるあらゆる研究

界面活性剤をはじめ、工業的に幅広い用途で使用されてきたPFAS（有機フッ素化合物）は、難分解性、高蓄積性から近年環境や健康への影響が指摘されています。この課題解決の推進につながりうる、検出技術、分解手法、毒性・環境影響評価、代替材料の開発などに関する研究を広く募集します。

採択件数

若干名

助成内容

研究費50万円

申請締切

2025年10月31日（金）18時まで

パートナー企業

株式会社リバネス

担当者
より
一言

PFASの課題を解決していく上では、その影響を疫学的に正しく捉えることから、検出、分解などのプロセスの開発、PFASの代わりとなる材料の開発まで様々な知識を組み合わせることが重要だと考えています。今回の応募をきっかけに課題解決につながる新しい研究を生み出していく動きを申請者のみなさまと考えていきたいと思っています。

詳細及び申請方法についてはこちらから

<https://r.lne.st/>





世界を変える。それは大それた事かもしれません。それでも小さな一歩を踏み出すところから、それは始まります。本コーナーでは『リバネス奨学金』を活用して、世界を変える活動を開始した若手研究者の声を紹介します。

基礎医学研究を支える冷蔵輸送技術を、 いち早く世界に広めることを目指して

熊本大学大学院 医学教育部 博士課程3年
前田 龍成 さん



現在、遺伝子情報の保存や輸送を行うマウスバンク施設で、遺伝子改変マウスを「より効率良く研究者へ届ける輸送技術」を研究しています。遺伝子改変により作製される病態を模した疾患モデルマウスは、新規治療法開発を目的とする基礎医学研究において重要な研究資源です。しかし、遺伝子改変技術の発展によるマウス研究の需要増加と動物倫理の変化に伴い、低コストかつ簡易な操作で、かつ倫理の課題がクリアされた輸送技術の必要性が高まっています。その最適な手法の一つが、改変された遺伝子を含んだ精子を精巣上体尾部（精子を貯蔵する器官）ごと冷蔵輸送する技術です。私は、冷蔵保存中に精巣上体尾部と保存液間で変化していく分子を網羅的に解析し、輸送技術の改良に取り組んでいます。優れた技術も、現場の実践的な課題を解決しなければ当たり前利用されません。輸送技術が世界中で最大限に活用されるには、現場の一次情報を得て実践の課題を知る必要も感じていましたが、一歩を踏み出す勇気を持てずにいました。2023年前期に実施されたリバネス奨学金のゼミに参加し、熱意を持って泥臭く新しいことに挑戦するリバネスの社風や、自らの研究活動に情熱を持って行動するゼミ仲間に出会い、実際に技術が使われる世界中の現場を見に外へ踏み出す勇気をもらいました。

それから輸送技術の実装を広げるため、複数応募した研究留学の奨学金から2個採択いただき、約6ヶ月間、海外4つの研究施設へ留学しました。各施設では、技術の共有、現地の運用方法に関する情報収集、そして輸送実証試験を行いました。国ごとの文化や規制の違い、税関手続きなど、現場でしか知り得ない数多くの壁に直面しました。またブラジルは、施設間の共同研究が初の試みで、経験者も設備も不十分な状況でした。0から研究環境、技術、人間関係の構築を自ら行い、当たり前の研究環境では得難い経験を得ることができました。帰国した現在は、留学の経験を基に、基礎的な技術改良と、海外の研究機関との実践的な輸送ネットワークの構築を引き続き進めています。基礎医学研究を支える縁の下の力持ちの技術をいち早く世界に広めることを目指して、これからも活動を続けていきます。



▲留学先のリオデジャネイロ連邦大学（ブラジル）

探しに行こう 自分の場所

目標を見つけ、実力を養い、
理想の場所にたどり着くために
どんな道を進むべきだろうか。

どんな研究者になりたいのか、
活躍するには何が必要なのか。

そして、どんな研究キャリアがあるのか。

ただ、じっと待っていても答えは見つからない。

いろいろな人に出会い、

さまざまな場所を見ることで

自分の未来を描くヒントを見つけよう。

変化を楽しみながら

さあ、自分の場所を探しに行こう。

探しに行こう 自分の場所

アカデミアの外で 「人類学者」として生きる

水上 優 さん
合同会社メッシュワーク
共同代表

人類学は、ただ異文化を知るための学問ではない。それは、目の前の「当たり前」を疑い、前提を問い直すための視点でもある。そのまなざしを携え、さまざまな現場で実践を重ねているのが水上優さんだ。「人類学者」として、社会の中に“もうひとつの見方”を差し出す試みを追う。



「当たり前」への違和感が入り口だった

地方の進学校に通っていた高校時代、水上さんは自分の置かれた環境に居心地の悪さを抱いていた。有名大学に進学することが当然とされ、自分自身の価値観が他者に決められていく感覚があったという。大学入学後、人類学入門の授業で紹介された書籍を通じて、「牛の保有が社会的地位を左右する文化がある」ということを知る。人間の価値や基準が多様であることに衝撃を受け、自分が「当たり前」だと信じていたものが、実は数多くある内のひとつの文化や慣習であると気づいた。

この経験が、学問としての人類学への関心を深める原動力となった。人類学は、世界の多様な価値観や生き方をフィールドワークを通して経験し、人間の営みを相対的に捉え直していこうとする学問だからだ。大学生となった水上さんは、導かれるようにして文化人類学の道へと進み、大学院にも進学。修士課程ではエチオピア西南部における鍛冶職人の技法についてフィールド調査を行い、人類学的な思考を現場で実践する力を養って

いった。

社会に出て気づいた、自分の心の声

大学院修了後、水上さんは米国系IT企業に就職。その後、より人類学に近い領域で働きたいと考え、UXリサーチを手がけるコンサルティング企業へと転職した。ユーザー観察やインタビューといった手法によって、効率よくデータを収集・整理することは、サービス設計において重要な役割を果たすことができる。しかし、その意義や面白さを感じる一方で、人を調査の対象物として見る性質が強いと感じるようになった。次第に水上さんの中で、「ビジネスで出会う相手とも一人の人間として向き合いたい」という思いが芽生えていったという。

そのためには、あらかじめ設定された目的に対してノウハウを適用するのではなく、「そもそも何を知っていく必要があるのか」をクライアント企業とともに考えるところから関わる必要がある。そこで水上さんは「社会の中で人類学を実装する」という新たな実践を始めるべく、同じ志をもつ仲間と共にメッシュワークを創業した。



▲フィールドワーク中の水上さん（右）

人類学者の“目”で社会の課題を解決する

メッシュワークでは、企業の課題を解決するためのコンサルティングや研修で、人と向き合うことを重要視している。企業とともにフィールドに出て、現場を観察し、対話を重ねながら、「自分たちの事業とは、そもそもどんな意味を持つのか」「私たちは何のためにこの営みを行っているのか」といった根本的な問いを再発見するきっかけをつくっていく。単なるデータ収集や特定のゴールを想定したリサーチ手法ではなく、見方そのものを問い直すプロセスを大切にしているのだ。

その根底には、「人類学者の目をインストールする」という同社のミッションがある。水上さんは「人類学の特徴は、物事や人に対する視点や態度にある」と語る。対象を分析する以前に、まず相手と向き合い、その関係性の中で世界を経験していく。そうした姿勢こそが、本質であると考えている。メッシュワークは、「経営の本丸に近い場所で、事業の意味そのものを一緒に考えられる伴走者でありたい」という思いを実現するための場なのだ。

異なる視点が既存の枠組みをほぐす

「社会には様々な問題や悩みが存在します。一

水上 優（みずかみ ゆう）プロフィール

人類学者。合同会社メッシュワーク共同創業者。国際基督教大学、京都大学大学院にて文化人類学を修了後、米国系IT企業にて勤務。その後、UXコンサルティング企業にてメーカー等のUX企画に携わる。2022年にメッシュワークを創業以降、人類学的視点を企業やあらゆる組織でのリサーチやプロジェクトに取り入れるべく、実践と研究を続けている。

方で、別の視点に立てば、それは問題ではない可能性もあります。また、他の人にとっては切実な問題が別にあるかもしれません。そんな『オルタナティブ』を提示することが人類学の力のひとつだと思っています」と水上さんは語る。ここでいうオルタナティブとは、既存の前提や常識とは異なるもう一つの選択肢や見方のことを指す。

現在、水上さんがオルタナティブの提示を試みている場合は、企業経営やファイナンスの話題から、地域と企業の関係性、さらには未来洞察まで多岐にわたる。「自分が一般企業の社員のままだったら、ここまで幅広い領域に関わることはなかっただろうと思います。もちろん大変さがありますが、新しい世界に触れることができるのは本当に面白いです」

水上さんはこれからも、人類学の視点を携えて、さまざまな現場で実践を続けていく。

文：荘司 弘祐

文化人類学を学んできた身として、「視点をずらす」ことの難しさ、その先に広がる可能性をあらためて感じるとともに、アカデミアの外で実践を重ねる水上さんの姿勢に、勇気をもらいました。私自身も、日々のなかで別の視点に立つことを忘れず、丁寧に実践してまいります。



探しに行こう 自分の場所

技術の産業応用への挑戦が 育まれる舞台を創る

宮島 孝幸 さん

ダイキン工業株式会社
テクノロジー・イノベーションセンター
インバータ技術グループ

「空調といえば機械」。そんな業界の印象を塗り替えようと、電気の技術と挑戦心で道を切り拓いてきたエンジニアがいる。ダイキン工業株式会社（以下、ダイキン）の宮島孝幸さんだ。自らの情熱を起点に、社内でも柱となる研究を進め、東京で新たな研究開発拠点を立ち上げたその姿からは、「自分の場所は与えられるのではなく、自ら築くものだ」というメッセージが伺える。



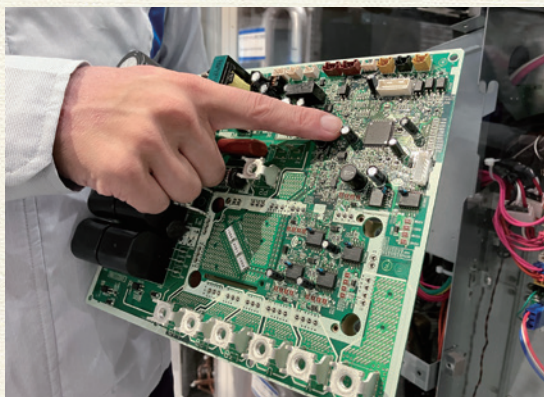
製品を通じて社会とつながる技術者に 惹かれて

博士課程でモータ制御を研究し、自動車部品メーカーとの共同研究に取り組んだ経験をもつ宮島さん。卒業後はアカデミアへの道も考えていたが、「産業に応用しなければ意味がない、コストなどシビアな条件を求められるところで勝負してみたい」といった思いから企業の就職を選んだ。ダイキンに入社したきっかけは、電気学会で出会った技術者たちの姿だった。社内では当時あまり主軸ではなかった電気の分野で立ち位置を作り上げてきた経験や情熱を聞き、心惹かれた。「なにより技術を楽しむように語る笑顔が印象的だったんです。こういう人たちと働きたい」と思ったという。その時出会った先輩には、入社後も、多くの指導をしてもらい、圧縮機・ファン向けモータ制御の技術開発に取り組んだ。自分が関わった製

品が実際に使われ、“社会とつながる感覚”が研究の手ごたえとして感じられたのが新鮮だった。

製品を世に出すまでに支えてくれた 仲間が存在

宮島さんはある時、製品の量産化が1年後に迫っているプロジェクトのチームリーダーに抜擢された。「試作段階から生産に移行する量産段階の流れを任せましたが、未経験のことも多く、逃げ出したくなるほど大変だった」と当時を振り返る。ダイキンでは、リーダーは昇進試験によってではなく、経験を重ねた上で任命される。その過程で、周囲との信頼関係を築き、自らの役割を見出ししていく。挑戦の中で壁にぶつかりながらも、乗り越えるたびに成長があり、自分の居場所が少しずつ形づくられていくという考え方がある。「産業に応用したい、という入社当時の思いを実現する経験ができたんです。土地勘のない分



▲リーダーとして初めて量産に関わった空調用インバータ基板

野で何度も壁にぶつかり苦しみましたが、一番成長できたと思える経験でした」と宮島さんは語る。不安の中でも、周囲は自然と手を差し伸べてくれた。応援してくれる仲間がいたからこそやり切ることができたのだ。

自ら手を上げ、新拠点を立ち上げる

現在、宮島さんは東京での新拠点立ち上げを担っている。これまで関西だけで研究開発していたインバータ（電力変換器）を東京でも研究開発するための拠点だ。「単に東京に人を置くだけでは意味がない。量産設計の部隊も巻き込んで、仕組みごと創ろう」と考え、自ら呼びかけた。各部門に声をかけ、ワーキンググループを発足し、社内調整や人材確保にも深く関わっている。海外出張の機会も自ら作り、現地のニーズを開発に反映させる取り組みを始めている。「英語は苦手ですが、技術が共通言語になります。飛び込めば案外なんとかなりますね」と笑う宮島さん。自らの頭で考え、作り、現場に行くからこそ分かることがある。宮島さんはチームメンバーにも希望者には積極的に海外に行くよう後押ししている。

宮島孝幸（みやじま・たかゆき）プロフィール
2014年ダイキン工業入社。モータ制御や製品開発の現場を経て、東京での研究開発拠点立ち上げを主導。電気学会産業応用部門にも所属し、産業界と技術研究の橋渡しを担っている。博士（科学）。新潟県出身。

広がり続ける「ダイキンの仕事」×
無限の可能性を持つ「人」を知り
たい方はこちら



挑戦を楽しむ仲間を支えられ、 次のステップへ

なぜこんなにいろんな挑戦が次々とできるのだろうか。「やりたいという思いだけではなく自ら課題やニーズを見つけて動けるかどうかを大事にしています」そう話す宮島さん。それが、これまで会社の中で学ばせてもらった、大事な考え方という。また、入社時に感じた「こういう人々と働きたい」という直感はとても大事だという。そんな人を巻き込むことで、1人ではできないことが実現できる。その根底には強い探究心と広い視野がある。「でも実際には、私はただがむしゃらにやってただけなんです。でも、そうすると、ちゃんと誰かが見てくれて、挑戦を支えてくれたんです」。技術を産業で使えるようにしたいという情熱が育まれる場所で、次への挑戦が生まれていくのだ。

文：岸本 昌幸

自ら課題を見つけ、仲間を巻き込み、居場所を育ててきた宮島さん。行動こそが“場所”をつくるのだと教えられた。



探しに行こう 自分の場所

地域に根差し、 人と技術の両方に向き合う研究職

河原 崇史 さん

新潟県工業技術総合研究所
工業技術研究職（化学）

博士課程で高分子材料の研究に打ち込んでいた河原さんは、恩師の紹介をきっかけに「公設試験研究機関」に出会った。そこは、大学でも企業でもない、“地域のものづくりを技術で支える駆け込み寺”だった。現場密着型の研究と企業支援を両立しながら、河原さんが見つけた「地域に密着した研究者としての新しい生き方」とは。



想定していなかった、公設試での仕事

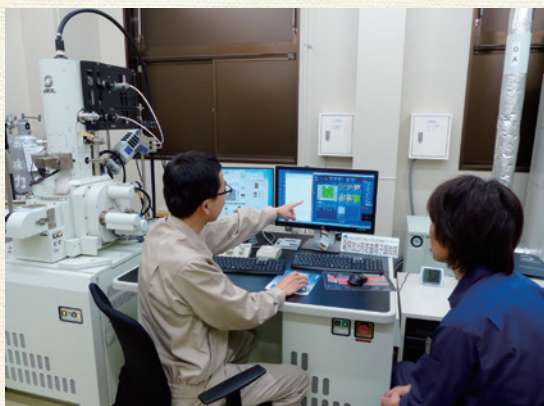
河原さんは修士・博士課程を通じて、樹脂材料の高機能化に関する研究に取り組んできた。目的は抗菌性、難燃性、生物忌避性といった機能を樹脂に付与すること。具体的には、機能に応じて化学的な官能基修飾を施したシリカナノ粒子を機能性添加剤として樹脂に混ぜて分散させることで、複合材料としての性能向上を目指すというものだ。研究を進める一方で、博士号取得後の進路については迷いがあったという。大学に残るにもポストが限られており、企業に就職した場合も「このままやりたい材料化学の研究が本当にできるのか」という不安があった。

そのような状況の中、恩師から紹介されたのが、新潟県の公設試験研究機関（以降「公設試」）である新潟県工業技術総合研究所だった。公設試とは、中小企業を中心に技術相談、試験・分析、共同研究などを通じて地域産業を支援する、地方自治体の技術支援機関だ。「当初は、理化学研究

所や産業技術総合研究所のような基礎・先端研究を主に担う国立研究機関を想像していました。しかし、調べていくうちに、公設試が地域の企業と密接に連携し、現場の課題を技術で解決する実践的な場であることを知りました」。社会の役に立つものをつくりたいという思いを強く持っていた河原さんにとって、「こんなキャリアの形もあるのか」と視野が大きく広がるきっかけとなった。

地域の製造現場の困りごとを解決する

新潟県工業技術総合研究所での業務は、大きく分けて2つの役割がある。一つは研究所内で行う中長期的な視点での技術開発や課題解決、もう一つは地域企業のニーズに応える共同研究や試験・検査といった実務的な支援だ。河原さんもこの2軸で日々の業務に取り組んでいる。研究開発では、植物などの再生可能資源を原料として製造される「バイオプラスチック」の性能向上に挑んでいる。バイオプラスチックは一般的に耐久性が低いとされるが、異種材料との複合化によって、引



▲検査業務を行う様子

張強さなどの機械的性質を高める研究だ。一方、企業支援の現場では、製造現場からの多様な技術相談に対応している。たとえば「製品に異物が混入した」という問い合わせに対しては、多様な手法を駆使して、製造のどの段階で混入したかといった原因究明を行う。こうした装置を自社で揃え、運用するのは中小企業にとっては難しい。だからこそ、公設試が持つ機器や技術が頼りにされているのだ。さらに、全国の公設試ネットワークを活用して、他県の研究員と情報共有を行う機会も多い。そうした経験を通じて、自身の技術も磨きながら、日々地域の課題解決に向き合っている。「社会の役に立つものをつくりたい」という思いが、公設試という環境の中で確かに生かされている。

技術に限らず広く企業に頼られる研究者へ

今後、河原さんが目指すのは、独自の技術の確立や専門分野の知識、測定のプロフェッショナルといった「技術の専門家」ととどまらない研究者としてのあり方だという。それは技術課題を入り口としながらも、広く企業が抱えている課題を相談できる存在だ。企業の課題は、技術だけではなく人手不足やコスト対応、事業の継続といった、

河原 崇史（かわはら たかし）プロフィール

新潟大学大学院自然科学研究科の博士課程修了後、ポスドク（博士研究員）として2年間大学で研究を続ける。その後新潟県工業技術総合研究所に入所。2021年に新潟県庁（産業労働部）へ異動し、2025年に工業技術総合研究所に復帰。専門はプラスチックなどの高分子材料。

より複雑な背景があることも多い。「だからこそ、その本質にまで踏み込み、必要に応じて他県の公設試、大学、スタートアップなどとも連携し、ワンストップで支援できる体制を築きたいと考えています」。過去には県庁で産業労働行政も経験し、技術支援という枠を超えて企業が直面する経営課題にも触れた。その経験が、広い視野を育てる転機となった。「まずは公設試に相談してみよう」と思ってもらえる存在になるためには、技術力だけでなく、柔軟な対応力と多様なネットワークが欠かせない。「専門を深めるだけが研究者ではありません。社会とつながり、価値を生み出していくのも、立派な研究者の道だと思っています」。河原さんはこれからも、研究と地域社会を結ぶ“つなぎ手”として、新しい研究者像を模索し続ける。

文：橋本 光平

河原さんにインタビューする前までは、私も公設試についてはほとんど知りませんでした。

お話をする中で、地元愛と地元をより良くしたいという想いで活動されていることがひしひしと伝わってきました。



あの町の研究者を訪ねて

このコーナーでは、ユニークな活動を続けている研究者を訪ねて日本各地を巡ります。
もしかしたらあなたのいる場所のすぐ近くでも、研究の旅路に行く素敵な誰かに出会えるかもしれません。

「感動とはなにか」 アートと分析で解き明かす

静岡理工科大学 情報学部 准教授

伊藤 明倫 さん

静岡理工科大学 情報学部 先端アート研究室 准教授。アーティスト・デザイナーとして活動する傍ら名古屋芸術大学、中京大学などの非常勤講師を経て現職。個人で映像インスタレーション作品、コラボレーションワークでインタラクティブ作品などの発表を行ってきた。また研究者と共同で、制作と研究の横断的な活動も行なっている。



感動するとは、どういうことだろうか。私はこの問いと向き合いながら、自分自身でアート作品をつくり、感動の正体を検証しています。そのなかで「動き」という要素が、人の心の動きに関係しているのではないか、という仮説を立てました。たとえば映画は、1秒間に24コマ(24fps)の静止画が連続して動くことで成り立っています。この24コマを画面上で24分割し、1マスごとに1コマずつずらして表示しました。映像としては動いているのに、どこかズレているような違和感が生まれる設計にしたのです。見た人に、何気なく見過ごしている動きを、違和感として認識し、心が揺らぐ体験を届けたいと思い、つくりました。私は、映像作品における感動には、物語の意味を理解するだけでなく、無意識の知覚や感覚の揺らぎも重要だと考えています。

幼い頃から絵を描くのが好きで、父が伝統工芸職人だったこともあり、自然と芸術の道へ進みました。自分のアート活動が「研究」にもなると気

づいたのは、同世代の研究者やクリエイターとの出会いがきっかけでした。彼らに作品を分析・評価してもらうなかで「再分析し、次の問いに活かす」という視点が生まれ、学会で発表するようになり、様々な分野の研究者と出会う機会が増え、活動の幅は広がりました。

活動の幅が広がる一方で、静岡県に拠点を移したことで新たな課題にも直面しました。地方では、ギャラリーや研究者との出会いの場、つまり新しい研究が生まれる場が限られています。そんな中、出会ったのが「超異分野学会」でした。名前を見た瞬間に「行くしかない!」と飛び込みました。哲学や芸術など「問い」を持つ人に、もっとこの場に参加してほしいと思いました。アーティストも研究者も自分の中にある「問い」を起点に活動しているという点で根っこは近い存在だと思います。分野を越えて、問いを共有しながら創作する。そんな場からこそ、新しく面白いものが生まれるのではないのでしょうか。(文・土屋 菜摘)

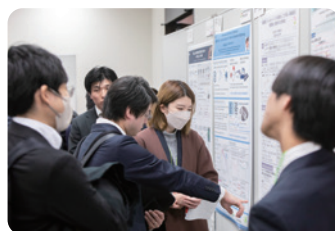
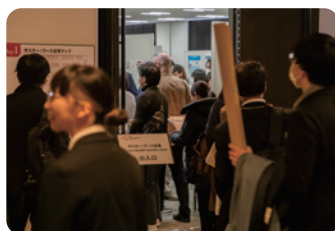
超異分野学会で発表!

～新たな出会いを探しに来ませんか?～



超異分野学会は、研究者、大企業、町工場、ベンチャーといった分野や業種の違いにとらわれずに、議論を通じてお互いの持っている知識や技術を融合させ、人類が向き合うべき新たな研究テーマや課題を捉え、共に研究を推進するための場です。

聴講者・ポスター演題募集中!



ここが推し! ポスター会場では、毎年**熱**のある議論が巻き起こります!
新しい出会いから、新たな知識製造が行われます!

[参加対象者] 中学・高校生、アカデミア、ベンチャー、大企業、町工場、自治体 etc...

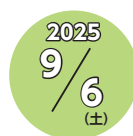
[参加費] アカデミアの研究者・学生は無料

注目企画! 知識製造イグニッション

「点火、着火」という意味をもつイグニッション。異分野・異業種の参加者同士で行われる会場内での対話から新たな研究プロジェクトの創出を目指します。

- 流れ**
1. チームを形成し、研究プロジェクト案をつくってエントリー
 2. ピッチ企画で発表
 3. 選ばれたプロジェクトが、リバネスも伴走支援しながら実現へと動き出す

これからの開催予定



超異分野学会 大阪 2025

[日時] 2025年9月6日(土) 09:30 ~ 18:30

[場所] グランキューブ大阪(大阪府立国際会議場)
(大阪府大阪市北区中之島5丁目3-51)

[聴講者募集中] <https://hic.lne.st/schedule/osaka2025/>



超異分野学会 豊橋フォーラム 2025

[日時] 2025年11月29日(土) 10:30 ~ 17:30

[場所] 豊橋サイエンスコア
(愛知県豊橋市西幸町字浜池333-9)

[演題登録募集中] <https://hic.lne.st/schedule/toyohashi2025/>

[演題登録締切] 2025年10月24日(金) 23:59



超異分野学会 東京2026

[日時] 2026年3月6日(金) ~ 7日(土)

[場所] ベルサール新宿グランド コンファレンスセンター
(東京都新宿区西新宿8丁目17-1 住友不動産新宿グランドタワー 5F)

[詳細] <https://hic.lne.st/schedule/tokyo2026/>

[演題登録締切] 2025年12月26日(金) 23:59



リバネス 超異分野学会 検索

参加申込・詳細はこちら

<https://hic.lne.st/>

私らしく、研究者として生きる道へ アド・ベンチャーフォーラム



AVF (アド・ベンチャーフォーラム) は、「研究者の新たな活躍の場を発見する」をテーマに、学生・ポスドクといった若手研究人材とベンチャー企業が出会う場です。

会社説明会のように一方的に企業の話聞くのではなく、「これからの研究テーマや課題」、「社会に貢献したいこと」を語り合う仕掛けを用意しています。ここでの出会いが、研究者として新たな活躍の道へと踏み出す第一歩になります。

1. ショートセミナー：研究内容だけでなく、その背景にある想いも伝え、 連携を加速する自己紹介を作る

自分の研究内容だけでなくその背景やそれに取り組む想いを自分の言葉で表現した自己紹介は自分と立場の異なる人と連携を開始するための土台になります。ショートセミナーでは、参加者自身の「Question (問い)」「Passion (情熱)」を整理し、より効果的な自己紹介を作成します。その後のブースセッションでのコミュニケーションをより良い物にすることを目的としています。

2. ブースセッション：ベンチャー企業と直接対話する



企業側からの一方的な情報提供ではなく、企業と学生の双方向の対話を通じて価値観や研究の背景にある想いを共有できる機会です。対話の中で、企業と学生双方に価値のある連携プロジェクトの構想や、共同研究、インターンシップの実施に向けた議論が進みます。

3. アド・ベンチャー奨学金：自身の ビジョンを伝え、共創を提案する

ブースセッションで議論した連携プロジェクト案について、具体的な提案を、ベンチャー企業に対して行います。そして、実際にそのプロジェクトを前に進めるために、活動費の支援としてアド・ベンチャー奨学金という制度を設けています。当日申請をした参加者の中から、選ばれた方に10万円の活動費を支給し、その後の活動をサポートします。



若手研究者とベンチャー企業の共創が生まれています (2025年4月の採択者)

採択者	連携企業	テーマ
平良 文哉	モバイル・インターネットキャピタル株式会社	固定電話向け詐欺検知 AI デバイス「サギ止め太郎」
矢田目 翔理	株式会社ミーバイオ	企業と共に新たなタンパク質改良に取り組みたい！
鮎澤 颯	株式会社 Hundred Semiconductors	ミニマルファブにおける磁気ねじ直動機構を活用した搬送技術の基礎検討
平岩 恋季	株式会社プランテックス	光と水が育むアマモの個性ー植物工場から探る海草の可能性ー
諏訪園 悠	株式会社 NEXTAGE	本わさびの無菌組織培養系の確立による品種改良と安定供給への基盤構築
浅見 亮太郎	株式会社 BIOTA	ケガの少ない人工芝グラウンドの実現に向けた学術と現場の連携プロジェクト
中野 和久	株式会社リバナキャピタル	ベンチャー企業の持続的成長に向けた企業の歴史構造化手法の提案

テーマ詳細は AVFweb ページ「連携事例」のコーナーでもご紹介しています。 <https://avf.lne.st/success-stories/>

採択者 PickUp!

- **テーマ:** ミニマルファブにおける磁気ねじ直動機構を活用した搬送技術の基礎検討

- **連携企業:** 株式会社 Hundred Semiconductors

- **採択者:** 名古屋大学 鮎澤 颯さん

● 連携内容

現在、半導体の多品種少量生産に適した次世代製造プラットフォームとして「ミニマルファブ」が注目されている。装置内の搬送機構においては、クリーン環境下での高精度かつ低コストな搬送を両立することが依然として技術的課題とされている。本活動では、非接触直動機構である「磁気ねじ」に着目し、ミニマルファブ環境における適用可能性を検討する。

● 申請理由

申請者は、これまでの研究活動を通じて得られた知見を実社会に適用させることの重要性を強く認識している。アド・ベンチャーフォーラムでの企業関係者との対話を通じて、ミニマルファブには継続的な技術革新が求められている現状を実感し、これまで取り組んできた磁気ねじ技術を応用することでその発展に貢献したいと考えている。

● 将来のビジョン

磁気ねじを活用した非接触搬送技術を、多品種少量生産を支えるミニマルファブの基盤技術として確立し、装置内搬送の革新を通じてその普及と社会実装に貢献していきたい。



Add Venture Forum 2025 冬 開催決定！

【日時】2025年12月6日(土) 13:00～17:30 予定

【場所】センターオブガレージ (東京都墨田区)



最新の開催情報は、上のQRコードから AVF 公式ページをご覧ください。

研究キャリアの相談所

募集中の求人情報

研究に熱い企業があなたを待っています！

QRコードから各求人の詳細情報をご覧ください。興味のある方は各ページの「エントリーする」からご応募ください。リバネスの担当者からご連絡します。

募 集 職 種

研究職

株式会社イノカ

アクアリストの力と AI・IoT 技術を組み合わせる任意の生態圏を水槽内に再現する『環境移送技術[®]』を活用した事業を展開。「自分たちが好きな自然をみつづける。」をフィロソフィーに、「人類の選択肢を増やし、人も自然も栄える世界をつくる」ことを目指しています。本技術を用いて、海水・淡水問わず様々な水環境を再現した水槽内で行う研究、リアルな生態系を子どもたちに見せる環境教育（環境エデュテイメント）を行なっています。



募 集 職 種

研究企画職

aiwell 株式会社

東工大発ベンチャー企業として、東京工業大学との間に協働研究拠点を設け、タンパク質の網羅的解析技術『プロテオミクス』の実用化と社会実装を進めています。タンパク質の変異を画像の比較で特定することで、創薬の現場等でのバイオマーカー候補の早期の発見や、化粧品や食品等の効能効果のエビデンス取得も可能になりました。将来的にはタンパク質を AI の画像判断技術に落とし込み (AI プロテオミクス)、病気の早期発見や医師の診断支援を目指しています。



募 集 職 種

事業開発職

株式会社 AutoPhagyGO

大阪大学発バイオベンチャーとして、オートファジー研究の成果を産業活用することを目的に設立されました。細胞内の物質や構造を分解して、細胞を再生する「オートファジー」は、老化の予防や老化関連症状を改善させる食品等の開発や、老化関連疾患の治療を行える可能性がありますと期待されています。オートファジーに関する研究開発と社会実装のオープンイノベーションプラットフォーム構築のための仲間を募集しています。



募 集 職 種

プロジェクトマネージャー職

株式会社ガルテリア

耐酸性紅藻「Galdieria」を通じた貴金属及びレアメタルのリサイクル事業、水質浄化事業、土壌浄化事業における研究開発及び製造を行っているスタートアップ企業です。目下、実現にむけて、藻類の大量培養技術に挑戦する経験のある方を募集しています。地球規模の課題解決のための研究開発をしてみたい、と思っている方、ぜひ仲間になってください。



募 集 職 種

研究員 (情報工学・LCA / マテリアルバランス・水工学・水産・微生物 / 微細藻類)

株式会社ノベルジェン

バイオテクノロジーを活用したグリーントランスフォーメーション技術を用いて環境問題や食糧問題を解決する事業を行っています。農林水産省中小企業イノベーション創出推進事業（フェーズ3基金）に採択され、事業を加速しており、主任研究員・研究員を募集いたします。



『incu・be』を作っているのはどんな人？

編集部スタッフを紹介します



ライター
橋本 光平
修士（生命科学）

プロフィール

株式会社リバネス 教育開発事業部／ものづくり研究センター。北海道大学大学院生命科学院生命科学専攻修士課程修了（生命科学）。学生時代には、昆虫の学習に関する研究を行う。未来の研究に取り組む仲間づくりのための次世代教育から地域中堅・中小企業とスタートアップとの共創による新事業創出を支援するオープンイノベーション新事業創出支援事業などに複数従事。

大学院時代では、コオロギの社会学習について研究していました。コオロギも人間のように、隣の人がおいしそうに食事をしていると「食べたことがないけれど、きっとおいしいのだろう」というような学習ができます。人間の脳の神経細胞の10万分の1程度の小さな昆虫の脳の中に、人間の学習と通じる現象が潜んでいることに強く惹かれ、その学習メカニズムを研究していました。研究自体はとても面白く、深掘りしたいという思いもありましたが、「あとに続く仲間をどう集めるか」「この研究をどうすれば社会とつなげられるか」という問いが浮かび始めました。そんなときに出会ったのがリバネスです。興味を持ち始めていた教育事業を祖業として行っており、研究者が持っている技術の社会実装まで行っている。直感的に、ここしかないと思いました。現在は、世の中にあまり知られていない昆虫の魅力を中高生に伝える記事を書いたり、環境保全や食糧問題の解決など、昆虫の能力を生かして課題解決に挑戦しようとしている研究者を発掘して社会実装の伴走をしたりしています。

最近では、社内の多様なバックグラウンドを持つ人たちと関わる中で、長年にわたって地域を支えてきた中堅・中小企業にも関心を持つようになりました。その中で会ったのが、新潟県工業技術総合研究所の河原さん（P20～21）です。公設試に所属し、現場の課題と中長期的な研究の両方に向き合う河原さんの姿から、研究が地域の中で活かされ、人や技術をつなぐ軸になり得ることを実感しました。次世代、研究者、中堅・中小企業といった一見すると異質に見える存在同士で、昆虫と花のように相利共生の関係を築くことで、研究をもっと世に活かしていけるのではないかと考えています。

リバネスでは仲間を募集中です。

「科学技術の発展と地球貢献を実現する」の理念のもと、自らの専門性を活かし、未来を創造するプロジェクトを生み出したい研究者の仲間を募集しています。『incu・be』の制作などを通じて多様な研究者に出会うことができます。リバネスの採用については、28ページ以降をご覧ください。incu・be編集部への投げ込みも大歓迎です！巻末の連絡先までご連絡ください。

株式会社リバネスは 修士・博士を積極採用中です！

リバネスの採用では、採用希望者との相互理解のプロセスを大事にしており、その入口となる機会を用意しています。会社に採用希望者が合わせるのではなく、採用希望者のえがくビジョンが、未来のリバネスを作っていくと考えているからです。ぜひ積極的に活用して、自分が社会で描きたいビジョンにリバネスがマッチするか、みていただきたいと思います。



■リバネスをどこで知った？

直近数年で入社した人にリバネスをどこで知ったかヒアリングしたところ、ウェブサイトや就職サイトより、知人や先生からの紹介、イベント参加を通じて知った人が多くいました。中には、中高生時代に実験教室やイベントに参加した雑誌『someone』を読んでいたという人もいます。

知人からの紹介	7名
先生／就職支援担当からの紹介	6名
イベント参加を通じて	6名
講演聴講	4名
そのほか・ウェブ・書籍・研究費・新聞記事・フェイスブックなど	

相互理解の先にある会社選び

リバネスの『超異分野学会』でテクノロジーがつくる未来が見えた 正田 亜海

就職活動中、いくつか内定もいただいていたのですが、「本当にこれでもいいのだろうか」という違和感はずっとありました。というのも、ビジョンに強く共感できる会社がなかったんです。面接で「御社の〇〇に魅力を感じました」「御社では〇〇がしたい」とプレゼンをするんですが、どこか嘘をついているような感覚が拭えませんでした。知人の紹介でリバネスを知り、『超異分野学会』に参加しました。『超異分野学会』では様々なセッションが開催されていて、テクノロジーを通して社会課題を解決しようとする事例がたくさん聞けました。そこには自分の想像を超えた世界が広がっていたのすごくワクワクして、まるでタイムマシンに乗って未来にきたようでした。その後、入社試験を受け、大阪本社へ配属になりました。



次ページにて、リバネスを知ることができるイベント等を紹介しています。

研究者向けにリバネスが仕掛ける、 イベント・プログラムに参加しよう

リバネスが主催するイベントやプログラムに参加することで、リバネス社員とのコミュニケーションや
目指しているイメージを共有することができます。詳細はHPで確認してください。

Visionary Cafe 参加者募集 研究を活かしたキャリアやプロジェクト創出について語り合いませんか？ Visionary Cafeは、参加者である大学院生や若手研究者とリバネス社員・役員が社会で挑戦したいことを語り合う場です。リバネスの雰囲気確かめにきてください。	日時：11月16日（日） 11：30～13：00 場所：リバネス本社 https://lne.st/0iv9 
ことまちカレッジ 特待生募集 墨田区の「ことまちラボ」を実践フィールドとし、「押上の街のにぎわいづくり」というテーマで大人と子どもが「一緒に活動し、互いに新しい発見をする」場作りに挑みます。学生は特待生として受講可能。リバネスの「ブリッジコミュニケーション」が学べるインターンシップです。社会人受講者に混じって刺激的な環境で学べます。	期間：10月31日～1月19日 場所：ことまちラボ (東京都墨田区押上) https://lne.st/recruit/intern-2/ 
地域テックプランター見学者募集 テックプランターは、大学や企業で生まれる科学技術の社会実装を促すプログラムです。自らの研究、技術で本気で世界を変えたい想いを発信する場となるテックプランングランプリを開催します。学生の方は見学可能です。	11月8日@東北 11月15日@関西 11月22日@岐阜&石川 https://techplanter.lne.st/japan_local/ 
豊橋フォーラム ポスター発表者募集 分野や業種の違う人々が知識や技術を融合させ、新たな研究テーマや課題を捉え、共に研究を推進するための場です。 ポスター発表が可能です。	日時：11月29日（土） ※ポスター登録締め切りは 10月24日まで https://hic.lne.st/schedule/toyohashi2025/ 
サイエンスキャッスル ワールド 2025 ポスター審査員募集 中高生の研究活動を支援してきたリバネスが、実力の拮抗した同世代と切磋琢磨する場として、口頭発表とポスター発表を中心とした研究交流の場を開いています。ワールドはアジア6カ国と日本の中高生研究者が集まる場。大学生、大学院生はポスター審査員として活動していただきます。	日時：12月13日（土）14日（日） 9：30～18：30 場所：東京科学大学 大岡山キャンパス https://castle.lne.st/schedule/science-castle-world-2025/ 

採用に関する詳細や最新のイベント機会は
「リバネス・採用」で検索してください

<https://lne.st/recruit/>

saiyo@lne.st





人材応援プロジェクト

私たち株式会社リバネスは、知識を集め、コミュニケーションを行うことで新しい知識を生み出す、日本最大の「知識プラットフォーム」を構築しました。教育応援プロジェクト、人材応援プロジェクト、研究応援プロジェクト、創業応援プロジェクトに参加する多くの企業の皆様とともに、このプラットフォームを拡充させながら世界に貢献し続けます。

(50音順)

株式会社ARK
artience 株式会社
株式会社IHI
株式会社IDDK
株式会社アグリライト研究所
株式会社アグロデザイン・スタジオ
アサヒ飲料株式会社
UntroD Capital Japan 株式会社
株式会社EAGLYS
株式会社イノカ
株式会社ACSL
株式会社Eco-Pork
エステー株式会社
大塚食品株式会社
株式会社ガルテリア
カルビー株式会社
キオクシア株式会社
京セラ株式会社
キリンホールディングス株式会社
建口ボテック株式会社
幸福ホールディングス株式会社
ザ・ハーモニー株式会社
株式会社サンケイエンジニアリング
三洋化成工業株式会社
株式会社ジャパンモスファクトリー
新明和工業株式会社
株式会社スタートアップクラス
株式会社セルフファイバ
株式会社Soillook
綜研化学株式会社
ソミックグループ
ダイキン工業株式会社
大正製薬株式会社
太陽誘電株式会社
株式会社中国銀行

東武不動産株式会社
東洋紡株式会社
株式会社ニッポン
日本ハム株式会社
日本たばこ産業株式会社
株式会社NINZIA
株式会社NEXTAGE
株式会社NEST RdLAB
株式会社BIOTA
長谷虎紡績株式会社
株式会社Hundred Semiconductors
東日本旅客鉄道株式会社
株式会社日立製作所
株式会社PITTAN
株式会社ヒューマノーム研究所
fabula 株式会社
株式会社フォーカスシステムズ
富士電機株式会社
株式会社フツパー
株式会社プランテックス
マイスターズグリット株式会社
Mipox 株式会社
株式会社MACHICOCO
株式会社マテリアルゲート
株式会社ミーバイオ
株式会社メタジェン
モバイル・インターネットキャピタル株式会社
モルミル株式会社
株式会社山田商会ホールディング
ヤマハ発動機株式会社
ugo 株式会社
株式会社吉野家
株式会社Liberaware
レボックス株式会社
ロート製薬株式会社

若手研究者のための研究キャリア発見マガジン 『incu・be』とは

『incu・be』は、目標を見つけ、それに向かって実力を養い(incubate)、未来の自分をつくり出す(be)ためのきっかけを提供します。自らの未来に向かって主体的に考え行動する若手研究者を、企業・大学とともに応援します。

『incu・be』の配布・設置について

『incu・be』は、全国の理工系大学・大学院の学生課・就職課・キャリアセンター等に設置いただいているほか、「研究応援教員」のご協力により研究室や講義にて配布いただいております。学校単位での配布・設置をご希望の場合、その他お問い合わせは下記までご連絡ください。

株式会社リバネス incu・be編集部
TEL : 03-5227-4198
E-mail : incu-be@Lne.st

中高生のための研究キャリア・サイエンス入門
『someone』(サムワン)



研究をはじめたばかりの読者に、最先端の研究内容をご紹介します。
未来の研究仲間となる後輩にお勧めください。
お問い合わせ：ed@Lnest.jp

++ 編集後記 ++

研究の話をするとき、研究の内容が話されるのは当然ですが、その研究をする人に焦点が当たることは少ないのではないのでしょうか。普遍性や一般性を重んじるために、個人の想いやストーリーという側面とは切り分けられがちなのかもしれません。でも、そういった人の側面を知ると、研究内容の捉え方にも深みが出てくる場面は多々あります。incu・beは研究に関わる全ての人に、そんな「研究者」のおもしろさを教えてくれる冊子です。自分も制作に関わってもう6年以上になりますが、毎回新しい発見があります。今号も過去号も今後の号も、長く読み続けてもらえると嬉しいです。(西村 知也)

Leave a Nest

2025年9月1日 発行

incu・be編集部 編
staff

編集長 西村 知也

編集 大坂 吉伸/楠 晴奈/藏本 斉幸

瀬野 亜希/長 伸明/濱口 真慈

記者 岸本 昌幸/駒木 俊/荘司 弘祐/土屋 菜摘

橋本 光平/三宅 進歩/八木 佐一郎

art crew さかうえ だいすけ

清原 一隆 (KIYO DESIGN)

発行人 丸 幸弘

発行所 リバネス出版(株式会社リバネス)

〒162-0822 東京都新宿区下宮比町1-4

飯田橋御幸ビル6階

TEL 03-5227-4198

FAX 03-5227-4199

E-mail incu-be@Lne.st (incu・be編集部)

リバネス HP <https://lne.st>

印刷 株式会社 三島印刷

© Leave a Nest Co., Ltd. 2025 無断転載禁ず。

